

本書によつて初めて明らかとなる幕末史・近代史の舞台裏の数々！

本書の特色

- 1 本書は、三吉慎蔵が書き残した約六十五年間におよぶ長大な日記全二十三冊を、読みやすく翻刻したものである。これまでほとんど紹介されることのなかった日記が本書によつて初めて通読可能となった。
- 2 幕末から明治にかけて、長府毛利家、北白川宮家、伏見宮家に仕えた三吉慎蔵は、みずからの見聞を克明に日記に記していた。本書によつて当時の宮家、大名華族の内部事情を知ることができる。
- 3 三吉慎蔵が仕えた皇族（北白川宮家、伏見宮家）、大名華族（毛利家）の家族問題・家政問題に関する詳細な記事が豊富。幕末から明治期の宮家、大名華族の研究の第一級史料である。
- 4 幕末の長府藩の様子、八月一八日の政変、幕長戦争から、大日本国帝国憲法公布、日清戦争まで、激動の時代の様子を生々しく伝える重要史料である。
- 5 作家・司馬遼太郎が長篇小説『竜馬がゆく』のなかで寺田屋事件のくだりを執筆するにあたって典拠とした「日記抄録 係坂本龍馬之件」を収録した。本書によつて寺田屋事件の詳細を知ることができる。
- 6 坂本龍馬、西郷隆盛、三条実美、岩倉具視、島津久光、毛利敬親、毛利元徳、伊藤博文、井上馨、品川弥二郎、山県有朋、榎取素彦、乃木希典など幕末から明治にかけての歴史をいろうった人物たちの動向を知ることができる。
- 7 下巻末に人名索引を付し、本書をより広く深く利用するための便をはかった。

三吉慎蔵日記 全二巻

揃定価：本体三八、〇〇〇円＋税（分売不可）

ISBN978-4-336-06040-2

二〇一六年九月二四日刊行予定

【造本・体裁】

A5判（二一〇×一四八^ミ）・上製クロス装・貼函入・セット函入

上巻Ⅱ五八六頁・下巻Ⅱ六七六頁

本文組Ⅱ一二Q二段組



国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15 Tel03-5970-7421 Fax03-5970-7427 URL:<http://www.kokusho.co.jp> E-mail:sales@kokusho.co.jp

帖合・書店印

申込書

国書刊行会『三吉慎蔵日記』[全二巻]を_____部申し込みます。

お名前

ご住所

お電話

*必要事項をご記入のうえ、書店へお渡しください。

幕末史・近代史研究の第一級史料、ついに刊行！！

三吉慎蔵日記

全二巻

三吉治敬〔監修〕

古城春樹・中曽根孝一〔編〕

国書刊行会



刊行にあたって

古城春樹

三吉慎蔵は、坂本龍馬の親友として知られる長府(山口県下関市)出身の人物である。天保二年(一八三二)の生まれで、日記は、天保七年(一八三六)から亡くなる直前の明治三四年(一九〇二)まで、約六五年間に及ぶ長大な記録となっている。幕末は長府藩士として動乱の渦中に身をおき、明治に入ってから、長府毛利家、北白川宮家、伏見宮家に仕えて、華族たちの日常、非常を目にしてきた者の人生が、そこに綴られている。一七〇〇人を超える登場人物も、この日記の魅力の一つだろう。

私が、三吉治敬氏のご厚意により全三巻に及ぶ日記原本に初めて触れたのは、慎蔵没後一〇〇年となる平成三年(二〇〇二)のことであった。その際、武士とは斯くなるものかと感じたことを、今も記憶している。一部臨場感溢れる書きぶりとなっているが、大半は淡々とした筆致であったためだ。長府毛利家の家史編さんに従事し、日記中にも登場する林洋三は、慎蔵の人間性を「沈勇寡黙にして堅忍不拔」と評しているが、まさにそういった気象が記事に表われているということかもしれない。

それにしても、三吉慎蔵あるところに事件ありとでも言いたくなるほど、慎蔵が向かうところよく事件が起こる。立場上巻き込まれるということもあるが、大抵は偶然的の遭遇だ。しかし、慎蔵は怯まず善後処理に奔走する。日記には、その姿がありありと記されていて、そこに慎蔵が他者から信頼される理由が、自ずと見えてくる。死を覚悟した龍馬が、愛妻お龍の後事を託したことも頷けよう。

初見以来、刊行される日が到来することを心待ちにしていたが、この度国書刊行会のご尽力により、ついに刊行の運びとなった。幕末明治史研究の一助として活用していただくことは勿論のことだが、日記を通して、三吉慎蔵の人生に何かを感じてくれることも期待して止まない。

(こじようはるき 下関市立歴史博物館 館長補佐)

【推薦のことば】

鮮やかに甦る 一個の志士の生き方



坂本龍馬

桐野作人

長く待望していた三吉慎蔵の日記が公刊された。非常に喜ばしい。三吉慎蔵といえは、長府藩士で、慶応二年(一八六六)一月二十三日、薩長同盟の締結直後に、坂本龍馬と共に伏見の寺田屋にいたところを幕吏に襲撃されたが、自慢の宝蔵院流槍術で応戦、龍馬を守った人物として知られている。

幕末史上名高い寺田屋事件の顛末はこの日記の白眉といえるが、三吉は単なる龍馬のボディガードではなかったことが日記によつてわかる。このとき、三吉は京都時勢探索の藩命をうけて上京していた。長府藩も長州本藩と異なる時勢対応を模索していた。だから、三吉も龍馬とは別個の独立した志士だったのである。

龍馬はほどなく落命するが、三吉は長命で明治の世を三数十年も生きた。長府毛利家世子の毛利元敏の傳役になつて同家に出仕しながら、廃藩置県後は宮内省の要請で北白川宮家や伏見宮家の家扶、家令も兼ねた。かくして、幕末の志士は宮家や主家を切り盛りする有能な家宰へと転じた。だが、三吉の念願はあくまで主家の長府毛利家に寄り添いつつ、主君元敏を支えることにあつた。還暦になつてようやくその願いがかない、長府に帰住している。

幕末の激動から明治の新時代、多くの志士が政治家や官僚、軍人へと転じるなか、それらとは異なり、世俗の栄達とは無縁に信念を貫いた一個の志士の生き方が日記から鮮やかに甦る。なお、巻末附録の「日記抄録 係坂本龍馬之件」は三吉と龍馬の関係を詳しく記した必読の史料である。

(きりのさくじん 歴史作家)

三吉慎蔵略年譜

- 一八三一年(天保二) 長府藩士小坂土佐九郎の、男として出生。幼名友三郎。
- 一八五二年(嘉永五) 宝蔵院流槍術師範小幡源右衛門より慎蔵と名付けられる。
- 一八五六年(安政三) 三吉十歳不快に付三吉家への養子入りが内決。
- 藩府に願書を提出し、同日入家。
- 一八五八年(安政五) 長府藩士正村喜三郎三女イヨと結婚。
- 一八六〇年(万延元) 長男米熊出生。
- 一八六四年(元治元) 馬関戦争に際し、関見台の警護につく。
- 一八六六年(慶応二) 京都情勢探索を命じられ、坂本龍馬と面談。
- 寺田屋にて幕吏に襲撃され、伏見薩摩藩邸に逃れる。
- 幕長戦争に際し、長府藩の五番大隊軍監兼応接役並びに六番遊軍大隊軍監を拝命、側横目を免じられる。
- 伊藤九三・熊野直介より龍馬の訃報が届く。
- 龍馬の妻・お龍を引き取る。
- 一八六七年(慶応三) 長府毛利家扶を拝命。
- 一八七〇年(明治三) 長府毛利家の東京移住に家扶として随従が決定。東京へ出立。
- 一八七一年(明治四) 宮内省御用掛を拝命。長府毛利家扶のまま、北白川宮御付となる。
- 一八七二年(明治五) 正七位に叙される。
- 伏見宮御付兼勤となる。
- 一八八五年(明治十) 北白川宮御付から同家令に昇進。
- 一八八六年(明治十一) 北白川宮能久親王の名代として島津久光の葬儀参列のため鹿児島へ赴く。
- 一八八七年(明治十二) 北白川宮家令辞職願を宮内大臣土方久元に提出。
- 一八八九年(明治十四) 宮内省より家令辞職が認められ、従六位に叙される。
- 一八九一年(明治十六) 長府に帰住。来関した伊藤博文と会談。
- 一八九三年(明治十六) 長府毛利家の家令を依願退職。
- 一八九四年(明治十七) 日清開戦に伴い報国会が設立され、同会の委員長を依頼される。
- 一八九六年(明治十九) 東京へ出張。井上馨や品川弥二郎と面談。
- 一九〇一年(明治三十四) 死去。

収録内容

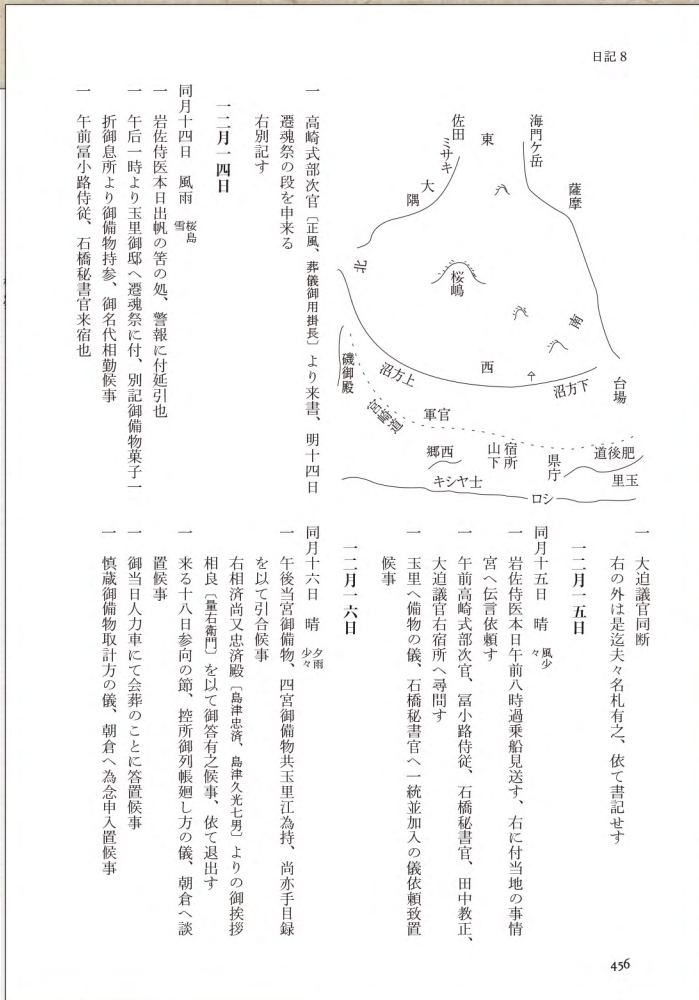
- | | |
|-------------------|----------------|
| 上巻 | 下巻 |
| 日記 一 (天保七年) 万延元年 | 日記 十一 (明治二十三年) |
| 日記 二 (文久元年) 明治四年 | 日記 十二 (明治二十四年) |
| 日記 三 (明治四年) 明治十五年 | 日記 十三 (明治二十五年) |
| 日記 四 (明治十六年) | 日記 十四 (明治二十六年) |
| 日記 五 (明治十七年) | 日記 十五 (明治二十七年) |
| 日記 六 (明治十八年) | 日記 十六 (明治二十八年) |
| 日記 七 (明治十九年) | 日記 十七 (明治二十九年) |
| 日記 八 (明治二十年) | 日記 十八 (明治三十年) |
| 日記 九 (明治二十一年) | 日記 十九 (明治三十一年) |
| 日記 十 (明治二十二年) | |
- 明治三十三年日載
明治三十四年日載
日記抄録 係坂本龍馬之件
日記附録 伏見宮御附兼勤中
解題 (古城春樹)
あとがき (中曽根孝一)
人名索引



北白川宮能久親王



乃木希典



組見本(72%)